

そっ たく

啐啄

令和4年5月1日刊行 No.20
編集・発行 大島町教育委員会
教育文化課事務局
TEL04992-2-1453
題字「井島 吉春」

感性を磨く

教育長 谷口 浄

啐啄の原稿テーマを考えると、さて、何を書こうかいつも迷ってしまいます。誰でもが読んでいただいて、興味や感心をもっていただけるようなテーマか、現在の社会で起っている争い事や二年前から続いているコロナ感染症の事など時事のテーマの方がよいのか、いろいろと考えても鉛筆は走っていきません。そのような中、今回は子どもたちへのメッセージになればとの想いで上記をテーマとしました。

人が生きていくなかで、すべてのことは「感じる心」から始まると言えます。

「好きだから夢中になる」「不思議だから調べる」「友だちと一緒に遊ぶのが楽しい」「仲良くしたいから相手を思いやる」など。そして成長するにつれて、それらの思いが、勉強や仕事、生き方につながっていき、その人の人生を彩っていきます。だからこそ、子どもの頃に「感じる心」をしっかりと育む、「感性を磨く」ことはとても大事なことです。

子どもは、日々の生活の中で直接的な出来事や具体的な体験を通して豊かな心情・意欲・態度を培い、成長・発達を促していく。その際に子どもたちは、新しいこと、珍しいこと、楽しいことなど、様々な場面で「もの」や「こと」に感じて心が動き、表現する。この「感じる力」（感性）は、自然・もの・人とのかかわりの中で培われ、人間の情緒・情操を養い、豊かな人生を築くための大きな力となっていきます。

辞書で見る「感性」の定義は、『感覚によって呼び起こされ、それに支配される体験内容。従って、感覚に伴う感情や衝動・欲望も含む。』とあります。つまりは思考力や知識、行動の源となる欲求を生むための力、「生きる力」と言えます。

我が家には三人の子どもがいますが、同じように育てたつもりでも、当たり前ですが性格は別々です。学校の先生の指導によるものかどうかは分かりませんが、小学生の時、同じ「消防車」の絵を画いたものがあります。一つは一般的に見て、上手だな、と思える画でバランス良く正確に画かれています。もう一つは、上も横も下もアップになっていて、画面の外へ飛び出して大膽です。最後は、とどこおりなく、全体がおさまっていて味わいもあります。それぞれが「正確で、ていねい」「大膽過ぎ」「味わいがある」という表現の違いがあるからこそ、おもしろさもあり、自分らしさ、個性が育まれているのでしょう。

また、小中学校連合音楽会が開催された時にも話をしましたが、リコーダーの「ピーッ」という音一つで、私は遠い地域の広々とした農村の中を一本の汽車が黒煙を吐きながら、汽笛を鳴らし力強く走り去っていく情景を思い浮かべる。また太鼓の「ドーン」という音を聞いて、振動の伝わりとともに海の波が岩にたたきつけられ、波しぶきが高く打ち揚げられ、風にのって陸へと運ばれる姿を思い出します。このように音一つにも、人の心にふれる大きな力を感じます。

子どもたちの「感性を磨く」ことで創造力が豊かになり、人としての魅力が増していき「生きる力」の原動力となっていくのではないのでしょうか。



今 つながり

教育委員長職務代理 山田 三正

ロシアのウクライナ侵攻、地球環境問題、情報・デジタル化変革など、世界では不安定化や分裂がいつそう進み、最近では、世代間の分断が際だってきていると思います。世界中の課題をリアルタイムで見ることができ、自分の身の回りの課題が世界とつながっていることを実感しています。その課題の解決に向かうには、世界を見て互いの違いを認め多様性を尊重し、様々な知恵を出し合って、協働していくことがますます重要になっています。

それは私たちの前の課題解決に向けても同じです。

その中でも現代社会は、「デジタル革新」とも呼ばれる、大きな変革のまっただ中にあります。西暦2000年の「IT革命」からこの22年の間に、デジタル技術は飛躍的に進歩しています。情報伝達では手紙電報電話ラジオテレビインターネット。今、様々な情報がデジタル化され、サイバー（仮想）空間の上に、データとして蓄積され続けています。そのうえ、膨大な情報を解析する技術が、人工知能技術などで発展し、そのデータを活用する仕事・ビジネスも次々と生まれ、新たなサービスが社会に広まっています。

サイバー空間上の情報を見ながら、リアルな現実空間を行動するようになってきています。スマートフォンが手放せなくなっている人も少なくないと思います。サイバー空間とリアルな物理空間のつながりは、遠隔医療やテレワークの実現のように、私たちの生活の質を向上させる「つなぎ」を数多く生みだしています。物理的な距離を超えて人々を繋ぐことは、現代社会が抱える地方と都市の間の格差や、年齢や障がいに関わる格差など、様々な問題の解決に役立つと思います。

Society5.0（全ての人とモノが繋がり、あらゆる知識・情報を共有することで課題や困難を克服する社会）を目指している今ですが、サイバー空間にある情報は、貴重な真実あり、造られたフェイクニュースありと様々な立場と考えのものが存在しています。それをきっかけにして、話題として盛り上がりたり群集として動いたりするなど、現代的な問題も発生しています。これまで良しとしてきた、社会の基本的仕組みや信頼を揺るがすことも起きています。学校でひとり1台のタブレットが使えるようになりました。いろいろな可能性を秘めています。

コロナ対応で様々な制約が今後も続き、やってはいけないことがあり、やらなければならないことがあります。いろいろな工夫で乗り越える努力をしています。まさにタブレットは離れた場所で情報を得て、その課題を解決するための道具の一つとなります。

「多数で集まってはいけない。マスクなしでの15分以上の話し合いは不適切。」「コロナウイルスの変異」それならば仮想空間で「みんなと集まり、話し合い協力して動く」。等等。

思うのは。

子供達がタブレットやパソコンをきちんと使いこなせるようになってほしい。

真実を見ぬく力。その真実から何を考え、何をするかを考えられる力を身に付けてほしい。

実行する力。やりつづける力。新しい知を身につけ、創造し未来を見据え行動できる力を身につけてほしい。

理科系とか文科系とかかくるのではなく、真実を科学的に考え経験で得た知恵を生活に生かす力を身につけ、画面の向こうにいる人を思い、つながることを忘れずにいてほしい。

*Society 5.0（ソサエティ 5.0）とは、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に合わせ、いろいろな課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）」の呼び方。

「勝利至上主義」

委員 井島 吉春

全国のスポーツ強豪校と言われるところで、しばしば行きすぎた指導、体罰、暴力などが報告されている。スポーツで名を売っているところなら厳しい指導が当たり前であろうと思うが、暴力はどんな場合でも決して許されるものではない。

一流と言われる選手を集め、一流と言われる監督やコーチが、なぜ一流ではない指導をしてしまうのだろう。

島内にも野球・バレー・サッカー・テニス・柔道・空手など部活動を含め多くのスポーツ団体が存在する。親としては我が子に何かしらのスポーツや武道などをやらせ心と体を成長させていくことに異存はないと思うが、その指導の仕方においてはいろいろな考え方があるようだ。厳しい指導を望み、我が子が上手くなるのを大いに期待する親もいれば、スポーツそのものを楽しむことができればそれで満足だという親もいる。当の子どもたちはどうなのだろう。誰だって怒られながら練習するのは嫌だし、本当はそのスポーツをやるのも本意ではないのかもしれない。

競技スポーツには必ず勝ち負けがつく。勝てば嬉しいし、負ければ悔しいのは当たり前だが、あまりにも勝ち負けにこだわりすぎるとスポーツ本来の楽しみや意義を捨ててしまうことになる。強豪校と言われるところほど勝ちにこだわるもので、だからこそ強豪校なのだろう。

全柔連が小学生の柔道の全国大会を廃止することにした。柔道の楽しみは練習した技で相手を投げることだが、この全国大会では勝つために組み手争いばかりしている試合もあるという。柔道の試合で勝つことだけを目的にしているのならば本来の柔道が目指している志とは真逆であろう。これには指導者の問題が大きいが、それだけではなく保護者を含めた周りの人間、日本社会全体の問題でもある。

バレーボール元日本代表の益子直美氏が「監督が怒ってはいけない大会」を開催し各地で少しずつ共感を得ており、過剰な勝利至上主義から脱却する価値観が浸透してきているらしい。厳しい練習で超一流選手となった益子氏が「子どもたちが指導者に怒られるのを見たくない。楽しい場を提供したい。」との思いで始められた大会だが当初、保護者などから批判を浴びたという。「そんなことでは強くなれない」「子どもが育たない」等、大変だったとどこかの記事で読んだことがある。

そもそもなぜ怒ったり高圧的な態度を取ったりする指導者がいるのか、それは自分の指導力のなさを隠すためであろう。なぜ厳しい指導が良いと思う保護者がいるのか、それはしごけば上手くなると根拠のない昔の根性論に洗脳されているからであろう。これらのことはすべて勝利至上主義が起因していると言える。子ども本人にしてみればたまったものではない。

私も大昔野球をやっていた時理不尽な指導があり嫌な思い出も多々ある。しかしその時代はただ耐えるしかなかった。肘や肩の痛みがあっても痛いと言って休むことなど決してできなかった。そのしごきで成功した人たちもいるだろうが、我が子を持つ親としては強豪校であろうとかなんだろうと全国どこでもそんな指導はやめてほしい。ついでに言う家庭での躰と称する体罰暴力も決して許されない。心や体の痛みはいつまでも残るものなのだ。現代社会において勝利至上主義は多くの問題を抱えており、これからも議論が必要となるであろう。



「教えるとは共に希望を語ること」

委員 山本 忠夫

以下は、私が20年ほど前に大島高校に在籍していた先生に教えて頂いた詩です。フランスの詩人ルイ・アラゴンの詩集『フランスの起床ラッパ』に収められている「ストラスブール大学の歌」の一節です。

Enseigner c' est dire esp é rance
教えるとは 希望を語ること
É tudier fid é lit é
学ぶとは 誠実を胸にきざむこと
Ils avaient dans l' adversit é
彼らはなおも苦難のなかで
Rouvert leur Universit é
その大学を再び開いた
À Clermont en plein cœur de France
フランスのまんなかクレルモンに

この詩が出された時代背景はきわめて熾烈で、生と死が隣り合わせの時でした。アラゴンは1943年ストラスブール大学の数百名の教授・学生がナチスに銃殺、逮捕されたことを題材に「ストラスブール大学の歌」を書きました。

ストラスブール大学はナチスの戦火を逃れてフランス中部に疎開し新たに開学しました。その極度の困難の中でも大学を続けたのです。そこではまさに「教えるとは希望を語ること」だったようです。また平和が当たり前ではなく、努力の末のものとなり「学ぶとは誠実を心に刻むもの」と悟ったのだと思います。・・・・・・・・・・・・・・・・・・このような説明でした。

今、実際にロシアとウクライナで戦争をしています。人が人を傷つけて良い訳がありません。なぜそうになってしまうのか私の頭では到底分かりません。人々が仲良く幸せのためにどんな世を目指せば良いのか…そのための教育というのは、責任重大だと思います。

若者に希望を語るために極度の困難の中でも大学を開く。教育へのものすごい意志の力を感じます。「教えるとは 希望を語ること」「学ぶとは 誠実を胸にきざむこと」今、改めてその大切さを痛感します。

笑顔の輪

委員 宮本 里香

数年前、大島の活性化・町おこしの為に観光プロジューサーの前田豪先生が、町の援助を受けずに自分たちの手だけで大島の観光を盛り上げようと呼びかけ、各地域で部会を立ち上げて、一つずつ呼び物をしたらどうかと提案したそうです。予算ももらえないのに、出来る訳がないと、その場から帰ってしまった人もいたようですが、「できないできないと言ってんじゃないよ。私はやりたい！やんべえよ」と、説明を受けた1人が言い、その後、笑う会に話があり、8人で出資して、推定樹齢850年以上と言われている国の特定天然記念物に指定されている桜株で、桜株祭りを開催することになりました。コンセプトや企画を立て、来てくれる人がいたら、楽しんでもらえるように、頭にはソーメン絞りの手拭い、紺の着物を着て、その下には動きやすいようにモンペをはき、どんな踊りをしようか、食べる物は何を置こうか等と、ワイワイと話し合いま

した。やることが決まれば、一人ひとりが自分にできることを探し、動きました。祭りで出す手作りの商品を作るには、大変な労力でしたが、とにかく一回りも年代も違う人達はパワフルでアイデアが豊富で、大変な作業中も笑いに包まれ、なんて素敵な人たちが身近にいてくれたのだと、何度も力をもらいました。祭りの準備や当日には家族・青年会・地域の方々など、多くの方が協力してくれました。そして、地域以外からも、たくさんの方が手伝いや祭りの輪に入ってくれて、桜株の下では大きな笑い声が響き渡りました。1年2年と回を重ねていくうちに手伝ってくださる人との連携・連帯もでき、祭りを楽しみに多くの方が足を運んでくれました。

10年間続けた祭りの間には東日本大震災もあり、はたして、祭りを開催してもいいものかと、話し合いを重ね、祭りを中止にするより、元気な所で何か応援ができることはないか？だったら、売上の全額を寄付しようと思われ、祭りを開催し、全額を寄付することができました。その後の大島町の災害にも寄付することができました。この祭りを見に来てくれた、さくら小学校の先生から、4年生の道徳授業で桜株祭りの話しをして欲しくないかと声をかけていただき、子どもたちと楽しい時間を過ごすこともできました。桜株祭りが、いくつかのマスコミにも取り上げられ、この祭りが地域・島内・島外の多くの人たちとの輪を広げてくれました。自分たちが楽しんでいると、周りも楽しんでくれる。笑いのある所には人が集い、輪が広がっていくのがよくわかりました。

4月から新しい環境で、人との出会いが始まっている人も多いと思いますが、笑顔は、知らず知らず大きな力になっていきます。今年度も、楽しい人たちと、たくさん笑い合いたいと思っています。

【大島町教育相談室のご案内】

大島町教育相談室は、教育相談員・指導員・社会福祉総合相談担当の5名体制で、子ども達や保護者、教職員のための相談対応、支援を行っています。

教育相談事業

不登校・いじめ・発達の遅れ・学業不振・非行など、子ども（小・中学生）のあらゆる教育相談について、本人や保護者及び学校関係者のご相談をお受けします。

適応指導教室「パレット」

さまざまな理由で学校に行きにくかったり、教室に入れなくなったり、登校できないでいる小・中学生のための居場所です。一人一人に応じた体験活動や学習活動を行い、学校復帰や進路の実現に向けて支援をしていきます。

困ったり、悩んでしまった時は、迷わず（2-4544へ）直通電話へ連絡ください

【連絡先】大島町元町字丸塚548番1 大島町生涯学習センター・郷内（2階）

電話：2-4544 メールアドレス：kyouikusoudan@citrus.ocn.ne.jp

※なお、来室される方は、教育相談員が学校訪問するなど不在の場合がありますので、事前にお電話にて確認のうえお出掛け下さい。

※啐啄（そったく）とは

鳥の卵が孵化しようとするとき、殻の中で雛鳥が外に出ようとして内からコツコツ殻をたたく音を「啐」といい、母鳥がその孵化の瞬間を悟り、殻の外をコツコツつき破ることを「啄」といいます。この啐と啄の呼吸が合うとうまく殻が割れ、丈夫な雛が誕生しますが、どちらか早すぎても遅すぎても良い雛は生まれません。教育も教わる側の生徒と教える側の先生が、啐・啄同時である事が理想であり、依って大島町教育委員会便りを『啐啄』と名づけました。

教育委員会カレンダー一年間予定表

月	日	内 容	場 所
4	16	体育祭野球・バレーボール大会（中学生の部）	二中グラウンド・二中体育館
5	15	体育祭バレーボール大会（婦人の部）	大島高校体育館
	22	体育祭ゲートボール大会	伊豆大島ゲートボール場
8	3	体育祭 水泳大会	弘法浜サンセットプール
10	9	体育祭レクリエーション大会	つばき小学校グラウンド
	30	体育祭 駅伝競走大会	泉津地域センター→陸上競技場
11	7	就学時検診	大島町生涯学習センター・郷
12	6	大島町立小中学校連合同音楽会	開発総合センター2階大集会室
	下旬	雪国体験学習	新潟県上越市大島区（予定）
1	8	成人式	開発総合センター2階大集会室
	13	大島町立小中学校連合作品展 （17日まで予定）	開発総合センター2階大集会室
2	4	体育祭 野球大会（小学生の部）	差木地地域センターグラウンド
	中旬	大島町文化祭 芸能大会	開発総合センター2階大集会室
3	上旬	大島町文化祭 作品展	開発総合センター

『大島町がめざす子ども像』

— 新たな「教育体制」の出発にのぞんで —

一、「夢」の実現を求める人をめざす。

未来の自分にむかって本気で考え、学ぶ努力をかさねます。

一、「命」を大切にする人をめざす。

生きるものすべてに、感謝・思いやりの心を持ち正しい行いを心がけます。

一、「郷土大島を「誇り」とする人をめざす。

愛する郷土・わが大島の、価値ある一員となるべく、進んで自己を鍛えます。

一、「国際的視野」を持って行動できる人をめざす。

グローバル化する国際社会に向けて、主体的に考え、国際的な創造力を持って世界を舞台に活躍できる人をめざします。

大島町・大島町教育委員会

（平成二十八年十一月）